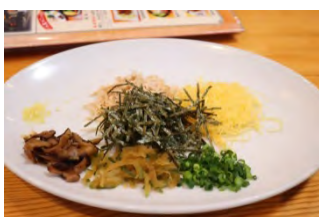


VI 金作原生林⇒鶏飯の店「鳥しん」⇒住用・マングローブパーク

朝も早かったし、金作原生林で歩いて運動したので、お腹も空いてきた。いよいよ奄美名物の鶏飯(けいはん)に味付ける。タクシーで、名瀬に戻り、鶏飯では有名な店の一つで屋根に鶏が鎮座ましましている「鳥しん」へ。急いで中に入ると、もうつきだしのゴーヤ味噌ともずく酢、それに鶏飯の材料が並べられている。



鶏飯の材料は、身を細かく引きほぐした鶏肉、錦糸玉子、甘辛く煮込んだ干しシイタケ、パパイヤ漬の薄切り、あと海苔と刻みネギだ。大きな茶碗にご飯を半分程度よそい、材料を自分が何杯食べるかで適当に割り振って乗せ、そこに熱々の鶏がらスープをかけるだけ。だし茶漬けといった感じかな。美味しいし、ご飯はおかわり自由なので、何杯でも食べられそう。2〜3杯食べると満足感に浸ることができる。ゆっくりする間もなく、今回の幹事さんから、今から急げば、マングローブパークでカヌーに乗る時間に間に合いそうだけどどうする？との問いかけ。全員乗りたいとの意思表示で、食感の余韻

も冷めやらぬうち出発することになった。お店を出て、国道58号線を一路約30分南下し、住用村の「黒潮の森・マングローブパーク」に到着、何とか間に合った。この「黒潮の森・マングローブパーク」は、マングローブ原生林とリュウキュウアユを育む貴重な自然の中、動植物と触れ合える自然回帰型の公園施設で、「道の駅 奄美大島・住用」として登録されていて、奄美大島の交通・観光の発信地として利用できるそう。われわれ一行は急いでチケットを購入、グラウンドゴルフコースを横に見ながらカヌー乗り場に急ぐ。一

応、転覆のリスクを考慮し、入り口のロッカーにカメラ以外の貴重品、財布や携帯電話を入れて、いよいよ乗り場へ。ちょっと雨がポツリと来たので、備え付けの雨具と救命胴衣を装着。一団が揃ったところで、指導員がオールの使い方を教えてくれる。いよいよカヌーに乗ることになるが、この歳になるまで公園のボートくらいしか漕いだことがないので心配だ。



特に、公園のボートは後に進むがカヌーは前に進むのだ。ガイドの指示で、マングローブ林までの往復コースを進む。ちょうど満潮にかかるころなので、まだ残っている浅瀬に乗り上げないようにと、潮が急なのと風があると流されやすいとの注意を受ける。進んでみると、意外と簡単



に操作できるので、マングローブの根っこが見え始めたところで、時々カメラでの撮影も始める。どんどん進んで、両側がマングローブ林の細い川を折り返し地点まで進むと、そこでガイドよりマングローブの説明があった。筆者は、マングローブという名前のついた樹木があるものと思っていたが大違いで、熱帯や亜熱帯地域の河口など満潮になると海水が満ちてくる潮間帯(海水と真水が混じり合うところ)に生えている植物を総称してマングローブと呼び、世界では 100 種類以上あるそうだ。この住用の原生林は、主にオヒルギとメヒルギというヒルギ科の 2 つの植物が中心に形成されているという。オヒルギは、日本国内では樹高 10m まで成長し、この奄美が北限だと言われている。根(呼吸根)は、屈曲膝根と呼ばれ、人の膝のように、根がポコポコと地中から出ている光景が見られる。赤い花(実は萼)を咲かせることから、赤花蛭木とも言われるが、実はその萼の内側にクリーム色っぽい花があるのだ。花には甘みの強い蜜があり、小型の鳥類が多く近寄ってくるそうだ。一方、メヒルギは、日本国内では最大でも 7~8m、幹はオヒルギに比べてひよろ長く樹皮は濃赤褐色でささくれており、タンニンを多く含み染料として用いられているようだ。花は白っぽく、5 枚の萼と 1cm くらいの糸状の花弁をもつ。胎生種子の形状がかんざしに似ていることから琉球筭(リュウキュウコウガイ)とも呼ばれているという。メヒルギと呼ばれるのは、胎生種子が真っ直ぐなバナナのようなオヒルギに対して、豆のような細く女性的であることから由来。また、オヒルギより寒さに強く、北限は静岡県伊豆半島に分布しているという。ガイドが、いろいろ説明してくれたが、とにかく、マングローブという名前の木がないことにびっくりだ。カヌー乗り場から少し歩けばマングローブ原生林を見渡せる展望台もあるそうだが、やはりカヌーに乗って間近に体験することをお勧めしたいな。



折り返し地点より、カヌー乗り場に戻る途中、日光が差し始め、マングローブ林の緑色が鮮やかに映える。無事に到着し、ほっとしたところでロッカーに預けたものを忘れないように！ 時間があれば、マングローブ館で館内の展示やシアターを観たいところだが残念ながら次の予定もあり

無理のようだ。その代わり、館内にお土産コーナーがあったので「奄美空港にはお土産を買うお店がありませんよ。」というバスガイドの〇さんの助言を思い出し、急いで大島紬の小物をいくつかゲットしておいた。



VII 住用・マングローブパーク⇒古仁屋⇒ホノホシ海岸⇒ホテル「THE SCENE」

ここから国道 58 号線をさらに南下し、奄美で一番長い網野子トンネル(4,243m)を抜け、島の南部の中心地瀬戸内町古仁屋(こにや)経由、ロマンチック街道をさらに南東方向に向かう。しばらく海沿いにアップダウンを繰り返し、高台でタクシーが停車。何かと思ったら、そこは「ハートが見える風景」という観光スポットで、海を見下ろすと何となくハート形の地形に見える場所だ。この奄美には、他にもハート形の観光スポットがあるそう。われわれは遠くからしか見ることができなかったが、奄美空港から近いところにあるビラビーチに「ハートロック」と呼ばれ、干潮時に潮だまりがハート形になるらしい。



ともに、若いカップルの観光客を呼び寄せるスポットなのだろう。一応写真に収め、そこから奄美



大島最南端のホノホシ海岸にあまり広くない道をくねくねと向かう。着いてみると、きれいなトイレも備えた広い駐車場がある。広い原っぱを歩き、さらにアダンの茂みを抜けるとそこは切り立った断崖に囲まれた荒々しい様相の太平洋。いかにも「パワースポット」といわれる所以だ。それも早朝、



日の出の時刻のパワーが強いという。海辺は、砂地ではなくピンポン球からテニスボールくらいの丸い石がごろごろしている。波打ち際から海の中まで丸い石が続いている。寄せる波が石たちを転がし、角を削り、丸くなっていったらしい。この丸い石を持ち帰るのは厳禁、持ち帰ると夜になると動き出し、災いが降りかかるとの言い伝えがあるそう。

また、この「ホノホシ」の名の由来は、この浜から大島海峡に抜ける陸の部分が、ひょうたんのくび

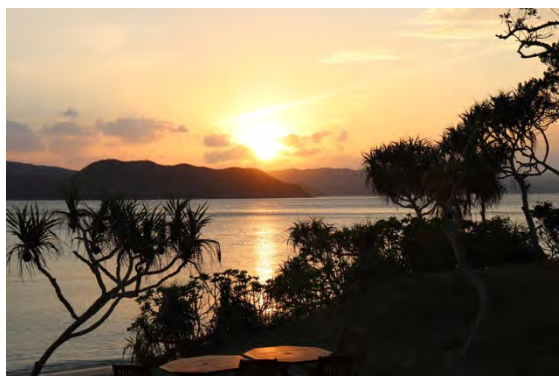


れ状になっていて、昔漁師が海路をショートカットして船を担いで歩いたことから、「船越」これが訛って「ホノホシ」となったと言われている。小高い丘には丸い石のモニュメントもあり、そこから海岸の景色が見渡せる。この海岸は海水浴には適さないが、この風景は一見に値すると思われる。

VIII リゾートホテル「THE SCENE」

いよいよ、本日宿泊するホテルに向かう。ホテルは、ホノホシ海岸からは近くに位置しているが、ホノホシの海岸の石がゴロゴロしているのとは違い、白砂の綺麗なヤドリ浜に面している。ちょうど日没直前に到着したが、ホテルの前庭のウッドデッキからの海そして加計呂麻島への日の入り、何とも言えない美しさだ。荷物を運びこむのも忘れそうなくらい見入ってしまう。部屋に入る前に、このリゾートホテル「THE SCENE」の総支配人で株式会社フュービック・リゾートホテルディビジョン取締役の小林良輔さんよりこのホテルのコンセプトや立ち上げ時のご苦労等のお話をいただいた。それによると、長い話になりそうだ。まず、小林さんの経歴だが、これがドラマチック。不登校だった高校時代、キックボクシングを始めたが、19歳の時に当時中古車販売をやっていたこの会社のオーナーに声を掛けられて入社。車の仕入れの査定や販売で実績を上げ、トップセールスマンとして店長に抜擢された。しかしながら、当時は売れない人の気持ちが分からず、部下のスタッフ全員に辞められてしまうという経験をした。そこでやっとマネジメントや人材育成の重要性に気が付き、独学で勉強し、一人前の店長として認められ、26歳で取締役に就任したと言う。

さらに、この小林さんをヘッドハントしたこの会社の社長である黒川将大氏がすごい。1993年（平成5年）22歳で中古車販売会社を立ち上げ、その後ビルの清掃業も、そして会社のコア事業に発展するリラクゼーション事業に進出、現在約1000名を率いる企業に成長させている。リラクゼーション事業では、日本全国に「コリフレッシュ」と「Dr. ストレッチ」を展開していると聞けばご存じの方も多いだろう。また、会社の商号である「フュービック」とは、小林さんの提案だそうだが、黒川社長の名前の「将」を将来のFutureと「大」のBigを掛け合わせたもので、会社の理念にもなっている「健康を通じて、人の未来を大きく」という意味を持たせているそうだ。





そろそろホテルの話に戻そう。2014年(平成26年)12月30日に黒川社長がいきなりホテルを見に行こうと言う。それも当時エアは1日1本JALのみで片道55千円もする奄美大島。しかも空港から車で約2時間半かかるし、ホテルはボロボロ。ダイバーでもあった社長は、売りに出ているから

これを買いたいと言うのだ。社長以外の役員は全員反対したが、社長はホテルの前面に輝く海と神の住む島と言われる加計呂麻島のロケーションに惚れ込み、これさえあれば必ず成功すると確信し、買うことにしたのだ。そして誰がこの事業をやるのかという段になり、白羽の矢が立ったのが小林さんだ。ホテルの運営経験のノウハウも持たない小林さんに「自分の好きなようにやってみろ」と突き放す。任された小林さんは、離島のリゾートホテルの成功例を学ぼうと屋久島のサンカラリゾートのコンサルを受けることで、社長にお伺いを立てたところ、「それでは、自分でやったことにならない。」とダメ出しをされてしまう。困った小林さんは、それでは「自分たちの手作り」でやってみようと思いを決め、全員社内から素人のスタッフを集めた。料理長は元マッサージ師で、目黒の雅叙園に本当に一から1年間修業に行ってもらったし、自らも週末にレストラン、ウェディング会場でノウハウを学んだり、ホテルでもベッドメイキングを教えてもらったりして、その技術を他のスタッフ要員に自ら研修を実施し人材を作った。こうして2015年(平成27年)9月に開業にこぎつけたが、オープンから1年間は予想以上の大赤字。開業時のホテルのコンセプトは、「本物のプライベート」ということで「カップル向け」であったが、これが正直なところ受けなかった。そこで、違うコンセプトでやってみようと考えているところに、あるヨガのスタッフが海と加計呂麻島の景色に涙して、「心が浄化される」と感動している姿を見て、これが売りになるのではないかと思いついた。自分の会社がメインでやっている「ヨガ」「ストレッチ」「リラクゼーション」を取り入れたプログラムを導入し、コンセプトを「Nature Cleanse(ネイチャークレンズ)」として「美容」「健康」「若返り」と共に心の浄化をテーマとしたものに切り替えた。ターゲットは、25歳~45歳の働く女性とし、広告戦略を打ち直したところ、これが当たり、2年目には黒字に転換することができた。「脳」、「心」、「腸」、「筋肉」を鍛えながら、快眠や腸内健康のための断食なども含めたプログラムは40種類以上にもなった。こうして上手く回り始めた時、突然社長がホテルを売却すると言う。せっかく軌道に乗り始めたのに、またこんなホテルを買う人がいるのかとっていると、オーナーは変わるが運営は引き続き続けるとのこと。結局、赤ちゃん用品の大手・ピジョンの会長さんが買うことになる。当初の投資金額をかなり上回る金額で売却ができたそう。こんな経緯で、現在4年目を迎えているという。小林さんは、実際にこの「美容」「健康」「若返り」を取り入れ

たアジアのホテルの体験もしてきているそうだ。1泊17万円以上もする快眠プログラムがあり、世界の有名人が訪れるタイのホアヒン(Hua Hin)にあるチバソム(Chiva-Som international Health&Resort)やモルディブのソネバフシ(Soneva Fushi Resort International)もホテルのコンセプトに取り入れるため訪れている。また、デジタルデトックス(Digital Detox=一定期間スマホやパソコンなどのデジタルデバイスとの距離を置くことでストレスを軽減し、現実世界でのコミュニケーションや自然とのつながりにフォーカスする取り組み)もプログラムに取り入れて好評を得ているそうだ。集客や広告戦略も独特だ。集客では、もちろんOTAも利用しているが、現在直比率が50%を超えている。広告も極力紙媒体は少なくしてSNSが主流で、リピート客へのアプローチもこれで行っているという。

これからは、ホテルに来てくれる人には「観光」のためではなく、「健康」のために来てもらう。近い将来、ドクターや看護師を常駐させカウンセリングを行った後トレーニングを行い、結果を検証したりするプログラムも考えている。また、「ど



こへ」ではなく「誰と」という考え方も試している。たとえば、会員を抱えているパーソナルトレーナーにアプローチし、神宿る島・加計呂麻島を見ながらヨガやフィットネスを行うプログラムで募集をすると、一度に多くの集客が可能になる事例もある。このような戦略を立てれば、オフシーズンでも集客はできるので、徹底的に「健康」と「誰と」にこだわっていきたいと述べている。

こんな話を聞いた後、ちょうどお腹も空いてきた頃ちょうどコースの食事会が始まる。料理の味は、比較的薄味と感じたので、スタッフに聞いてみると、やはり健康志向なので、塩分は少なめで調理されているという。でも、とても美味しい。その中でも、コースの終わり近くに出された「鹿児島黒牛 A5 肉のグリル」と「近海鮮魚の炙り飯」は絶品だ。健康志向の女性や高齢者に好まれそうなメニューであろう。ここでお開きとなったが、屋上にラウンジがあり、ちょっとした飲物を飲みながら夜空や景色が見られるというので、そこで奄美の黒糖焼酎をいただくことにする。この日は、月が大きく、残念ながら星が見えにくかったが、潮風に吹かれて海と対岸の加計呂麻島の明かりが何とも言えない気持ち良さだ。でもやはり11月、じっとしていると少し寒さを感じる。そこで、奄美大島唯一の天然温泉の露天風呂に向かう。ホテルからほんの少し離れたところにあり、海水浴の脱衣場といった感じかな。他に入浴している人もなく、独りでぬるめの黄金色の濁り湯に浸かって至福の時を過ごす気分は最高！ 景色は暗くてほとんど見えなかったが...

IX ホテル⇒古仁屋港⇒生間港⇒加計呂麻島

いよいよ筆者にとっては最後の日で、神宿る島・加計呂麻島に行く日になる。7:30 ホテル出発なので、簡単に朝食buffetを済ませバスに乗込む。今日のバスガイドさんは、ネイチャーガイドの大ベテランの方で、バスガイドは本職ではないらしい。加計呂麻行のフェリーは、瀬戸内町の古仁屋港から出発で生間(いけんま)港まで大島海峡を約20分だ。



周りの景色をボーッと見ているうちに着いてしまう。加計呂麻島は、奄美大島の大島海峡を挟んで南に位置し、面積は奄美大島の約10分の一強で海岸線が複雑に入り組んでいる。人口も50年前には8千人を超えていたが、今では1,500人くらいで、大きな商業施設もないようだ。島の



西にある薩川湾は戦争中軍港として栄え、大和や武蔵などの連合艦隊が停泊したことも有名だ。生間港に着いてまた同じバスに乗り、島の南端にある徳浜海岸を目指す。太平洋に面し、サンゴのリーフに囲まれた美しい砂浜で、サンゴの欠片がたくさん散らばっている。きれいで面白い形のサンゴをガイドさんもたくさん拾ってくれるので、孫へのお土産に持っていくことにする。

加計呂麻島は、渥美清の映画「寅さん」シリーズの第48作目(「男はつらいよ一紅の花」最終話)のロケ地で、舞台となった場所には、その記念碑等が建てられている。この徳浜海岸も、その一つで、寅さんとリリー(浅丘ルリ子)が見守る中、泉(後藤久美子)に満男(吉岡秀隆)が愛を告白するシーンと台詞の看板が立てられている。

次に向かうのは、デイゴ並木(瀬戸内町天然記念物)で有名な諸鈍(しょどん)集落だ。ここの海岸線に、樹齢300有余年からなる85本のデイゴ(インド原産のマメ科の落葉高木)の並木があり、毎年5~6月にかけて真紅の花を咲かせ島の情緒を呈することから、昭和53年に町の文化財に指定され、うち21本については、国の巨木樹に登録されているようだ。海岸線にマッチして連なるデイゴの並木は、本当に一見に値すると感じる。ここも寅さんのロケ地で、ここには寅さんが世話になっているリリーの家(現存しているが、外からしか見えない)に満男がリリーに連れてこられ劇的な再開を果す舞台なのだ。この海岸には、映画のシーンの石碑の他、山田洋次監督による「寅さんは、今」と題する石碑も建てられている。



寅さん(渥美清)は、1995 年秋ロケに来て、翌 1996 年 8 月にこの世を去ったが、この石碑には、「この地を気に入った寅さんは、リリーと愛を語らいながらのんびり暮らしているのだろう」と書いてある。この諸鈍には、他に島の中では立派な 2 階建ての建物「加計呂麻島 展示・体験交流館」なるものがある。階段を上がると、受付があり、観光案内資料も備え、詳しい説明もしてもらえる。その奥には展示室があり、「諸鈍シバヤ」に関するいろいろな解説(ビデオ)を加えた展示物が飾ってある。この建物にはきれいなトイレもあり、お土産もあるし、夜行貝を使った工作をする体験



コーナーもあるので、休憩するにはもってこいの場所だ。「諸鈍シバヤ」とは、源平・壇ノ浦の戦いに敗れて落ち延びてきた平資盛一族が、土地の人々と交流を深めるために伝えたのが始まりと伝承されている。展示・体験交流館から徒歩すぐの大屯神社(バスの車窓から見ただけ)の境内で、旧暦 9 月 9 日に催される。出演者は全員男性のみで、手製の「カビディラ」

と呼ばれる紙の仮面をつけ、陣笠風の笠をかぶり、即興的狂言や人形劇など 11 の演目を踊ったり演じたりするそうだ。この「諸鈍シバヤ」は昭和 51 年に国の重要無形文化財に指定されている。

最後に訪れたのが、大島海峡に面したスリ浜だ。ここはペンションや民宿が建ち並ぶ島のマリンレジャースポット。透明度の高い海のきれいな砂浜に貝殻やシーグラスが打ち上げられている。また、ここでもガイドさんがたくさん拾ってくれるので、これもお土産用に



袋に収納。ここも寅さんのロケ地で、空腹で文無しの満男(吉岡秀隆)が、リリー(浅丘ルリ子)にカレーをごちそうになる舞台でロケ記念の木製の表示板がある。スリ浜を後にして、きれいな海を左に見ながら、ランチをいただく「ホライゾンクラブ」に向かう。そこは、宿泊できるコテージも備えたカフェレストランで、オーナーの趣味を生かしたアジアンテイ

ストでコーディネートされた落ち着いた雰囲気のスポート。 レストランの店内は、アンティーク調に仕立てられ、インテリアを眺めながら食事を待つのも楽しいひと時だ。 ランチは、食の安全にこだわった料理で、オーナーが自ら獲ってきた魚や地元の無農薬野菜を使った日替わりメニューとのこと。 大きなサネンバナの葉っぱに乗せられたご飯に、メインの魚のフライ(タルタルソース付)、カラフルな野菜サラダが添えられ、ワンプレートでありながら楽しめる。 食後もしばし、コーヒーを味わいながらゆったり気分で、眠気をもよおそうだ。



でも、そんな気分には浸っている間もなく、フェリーの出航時刻が迫ってきたので、生間港に向かう。 20 分間の乗船でうつらうつらしながら、古仁屋港に到着。 ここからは、ひたすらバスで 2 時間弱揺られて奄美空港へ向かう。 空港で、エアーの席もバラバラなので、このツアーを解散し、各々帰路に着く。



X 最後に(まとめ)

今回のツアーは、2 つのリゾートホテルの視察がメインで、それに盛りだくさんの観光地巡りを加えたものだったので、結構強行軍だったね。本来、「リゾート」という趣旨であれば、できるだけホテルの滞在(STAY)を長くして楽しみたいところだったが残念。初日の「ネストアット奄美ビーチヴィラ」も 2 日目の「THE SCENE」もさすがに島内トップクラスの評判通り、すばらしいロケーションと独特のコンセプトをもって人気を得ているようだ。また機会を作ってそれぞれ独自のプログラムである「ネストアット奄美ビーチヴィラ」では《マリンスポーツ》を、「THE SCENE」では《健康とリラクゼーション》を体験をしに訪れたいものだ。共に、今後増築又は増床するときは、タイムシェアの導入も考慮したいとのことだったので注目していきたい。読者の皆様方も、往き帰りも簡単だし、訪れる価値のある島であり、ホテルでもあると思うので、是非時間に余裕を持ってお出かけすることをお勧めしたい。

このレポートを書くにあたっては、奄美大島観光ガイドの大久保由美子様、ネストアット奄美ビーチヴィラ GM の近藤哲様、吟亭のチー女将、奄美野生生物保護センター首席自然保護官の二神紀彦様、THE SCENE GM の小林良輔様他の皆様にご協力をいただきました。また、この視察旅行に誘ってくださった一般社団法人不動産協会の栗原昭広氏にも感謝です。

ここに改めて感謝をいたします。ありがとうございました。

《付録》

① マングースの捕獲に関する新聞記事(南海日日新聞)

鹿児島県奄美大島の防除事業検討会(座長・石井信夫東京女子大教授)の会合が 2019 年 1 月 31 日、奄美市名瀬であった。2018 年度の捕獲数は 1 匹のみ(前年度は 10 匹)と環境省が目標に掲げた 22 年度の完全排除に向けて、根絶確認の手法や再侵入の防止策などを協議、石井座長は「根絶が間近。手を緩めず捕獲を続けることが大事」と述べたという。

18 年度の事業報告によると、島全域に設置したヘアトラップや自動撮影カメラによるモニタリング調査で確認されておらず、今後罠や探索犬による捕獲が困難な地域で、それらに代わる新手法として、17 年度の初めて実施した薬剤を使った化学的防除試験について報告があった。そしてその効果も確認されており、必要に応じて適用を検討するとしている。

マングースの捕獲事業は、努力の甲斐もあり、マングースの密度は大きく低下したが、低下に伴い罠にかかる確率も低下しており、コスト対効果が悪くなっている。これは、生物学的には当たり前の現象で、密度が低下してからがこの事業の正念場だ。まったく、昔はこんな迷惑なことを提案する学者がいたものですね。

② 平家の落人伝説

この奄美大島には、喜界島・加計呂麻島とともに、平家の落人伝説がある。平家物語によると、壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた際、平資盛(平清盛の嫡男・重盛の次男)は、弟・平有盛と、従弟・平行盛とともに壇ノ浦で入水自害をしたとされているが、奄美大島の伝承によると、最初喜界島に3年間潜伏し(七城跡や平家森といった史跡もある)、その後奄美大島に渡ったとされている。3人で奄美を三分の一に分け、平資盛は島の南部を治め、加計呂麻島を本拠としたという。資盛は、加計呂麻島の諸鈍の「大屯神社」に祀られ、諸鈍シバヤと呼ばれる、村人と交流を深めるために、唄って踊る芝居を生み出したと言われている。また、平有盛は重盛の四男で、島の中央部を治め、名瀬浦上に築城した後の有盛神社に祀られている。さらに、平行盛は平清盛の次男・平基盛の長男で、島の北部を治め、龍郷町戸口にある行盛神社に祀られている。

(文責:一般社団法人日本リゾートクラブ協会 今泉陽一)